

市長記者会見記録

日時：2014年2月4日（火）午後2時30分～午後3時10分

場所：本庁舎2階 講堂

議題：「第10回 音楽のまち・かわさき アジア交流音楽祭」及び「2014かわさきアジアンフェスタ」の開催について（市民・こども局）

<内容>

司会： ただいまより定例の市長記者会見を始めさせていただきます。

本日の案件は、「第10回 音楽のまち・かわさき アジア交流音楽祭」及び「2014かわさきアジアンフェスタ」の開催についてとなっております。

まず、市長から、概要等について発表いたします。

それでは、市長、幹事社さん、よろしくお願いいたします。

市長： 皆さん、こんにちは。それでは、「第10回 音楽のまち・かわさき アジア交流音楽祭」及び「2014かわさきアジアンフェスタ」の開催について発表をいたします。

今年は4月12日の土曜日と、13日の日曜日の2日間にわたり開催いたします。お手元の資料にありますとおり、メインステージは4月12日土曜日の17時30分から、ミューザ川崎シンフォニーホールで開催をいたします。

また、伝統的民族音楽や、アジアの幅広い音楽をまちなかで気軽に楽しんでもらう「交流ステージ」は、4月12日と13日の2日間にわたり、川崎駅周辺の10会場で開催をいたします。

そして、今年も音楽祭にあわせて、川崎駅周辺の商業施設や商店街などと連携した「2014かわさきアジアンフェスタ」を同時開催いたします。

それでは、今回のメインステージの音楽監督、羽毛田丈史（はけたたけふみ）さんをご紹介させていただきます。今回は、羽毛田丈史さんを中心として、会場のミューザ川崎シンフォニーホールならではの美しい音響と、臨場感のあるコンサートを演出していただくことになっております。

それでは、羽毛田丈史さん、よろしくお願いいたします。

羽毛田丈史： 羽毛田丈史です。よろしくお願いいたします。

今回の音楽祭の音楽監督を務めさせていただきますが、僕はライブイマージュというコンサートを14年続けていますが、今回はアジアンフェスタ10回目という記念

すべき回に、ライブイマージュヌーボーという形で参加させていただきます。大変響がすばらしいミュージア川崎でこのイベントをやらせてもらうということは、ほんとうに大変光栄に思っております。ほんとうにありがとうございます。

内容は、いつもは大編成でイマージュコンサートというものをやっているんですが、今回はアコースティックで、皆さんに、お客さんにミュージシャンの息づかいとか身近に感じてもらって、温かい雰囲気を感じていただければということを目指して、そういう身近なコンサートができるといいなと思っています。

今回、こちらに座っていらっしゃるアーティストの方が、通常は1人ずつやっていくのが普通のフェスティバルなんですけど、今回は少しコラボレーションというか、いろんな人同士の交流みたいなことが音楽の中でできればいいなと思っています。これから皆さんと相談しながら楽しいコラボレーションができることを考えていこうかと思っておりますので、ひとつどうぞよろしく願いいたします。

では。

朴葵姫： 皆さん、初めまして。ギターの朴葵姫（パク・キュヒ）と申します。

私は、このライブイマージュの企画のコンサートに初めて参加させていただくことになりました。とても光栄に思っております。どうぞよろしく願いします。

Wei Wei Wuu： 皆さん、こんにちは。私、上海出身の二胡奏者のWei Wei Wuu（ウェイウェイ・ウー）です。

日本に来て、もう20年たちました。もう日本は自分のふるさとのように思う今日このごろです。日本と中国の間で、音楽を通じて、今まで架け橋として頑張ってきた、活動してきたつもりではありますが、今回はこの形でより一層、2つの国の間で架け橋になればうれしいなと思っています。頑張りますので、よろしく願いします。

松谷卓： 作曲とピアノの松谷卓（まつたにすぐる）です。よろしく願いします。

今回、このライブイマージュヌーボー、これまでも参加してきてるんですけども、今回、このアジア交流音楽祭、このイベントに参加できることを大変光栄に思っています。皆さんとてもすばらしいアーティストで、とてもすてきな音楽をつくられたり、演奏したりという中で、自分の音楽を皆さんに届けられることをうれしく思っていますし、ミュージア川崎での演奏も初めてになるので、とても楽しみにしています。よろしく願いします。

NAOTO： 初めまして。バイオリニストのNAOTO（なおと）と申します。

今回、アジア交流音楽祭に参加できるということでとてもうれしく思っております。僕、担当してるのがバイオリンという楽器なんですけれども、普通バイオリンはクラ

シックのイメージが多分皆さん多いと思われかもしれませんが、僕はポップスというジャンルをバイオリンという楽器を使って表現しています。そういう方というのは結構アジアの中でやってる人のほうが多くて、欧米の中ではあんまりこういうのがないので、この音楽祭にはもってこいの人選ではないかなと思っておりますので、ぜひ新しいバイオリンの楽しみ方を皆さんに、より提供できたらなと思っております。よろしくお願ひします。

小松亮太： こんにちは。バンドネオンという楽器を弾いてます小松亮太（こまつりょうた）と申します。

僕が担当というか、僕が弾いてる楽器というのは、ドイツで生まれた楽器なんだけれども、アルゼンチンタンゴで使われてる楽器なんですよね。だから、非常にアルゼンチンという国のローカリティーが強いというか、日本から一番遠い国の音楽を、日本人である僕が、ドイツの楽器を使って演奏するという、ある意味ではこれもうほんとうごちゃ混ぜ感がものすごいわけですけども、このアジアンフェスティバルの中で、そういう僕が弾かせていただくということにも、何か1つの運命を感じています。音楽には国境がないみたいなことを言われて久しいわけですけども、僕のやっこと、それこそそう、日本人がバンドネオン、ドイツの楽器を弾いて、アルゼンチンタンゴをやり、しかもウェイウェイさん、あるいは朴さんのような近隣の諸外国の方ともやらせていただくということで、非常に僕はうれしいし、そして僕がいる意味は大きいと信じております。どうぞよろしくお願ひします。

中孝介： 初めまして。中孝介（あたりこうすけ）と申します。

僕はこのミュージア川崎アジア交流音楽祭には2007年にも一度出演させていただきましたけれども、その後も2011年に出演させていただく機会があったんですが、震災でミュージア川崎のほうが使えなくなったとのことで、出演することができなくなってしまったんですけども、またこうやってお声かけいただいたことをすごく喜んで、うれしく思っております。音楽を通して、いろんな国の方が多分見に来てくれると思いますけれども、アジアが、このミュージア川崎という会場で1つに、音楽を通して1つになれたらなと思っております。僕は鹿児島県の奄美大島出身ですけども、奄美の風を、南の風を感じていただけるように一生懸命歌いたいなと思っております。どうぞよろしくお願ひします。

市長： ありがとうございます。説明というか、そういうものは以上でありますけれども、何かございましたらどうぞ。

司会： それでは、幹事社さんどうぞ。

《質疑》

幹事社： よろしくお願ひします。

すいません、7名の方、皆さんにお伺ひしたいんですが、川崎の印象ですとかエピソード、また、今までちょっとあまりご縁がないという場合であれば、行ってみたいところなど、川崎のお話を伺えればと思います。よろしくお願ひします。

羽毛田文史： じゃあ。岡本太郎美術館に行きたいです。あと、子どもを連れてドラえもん、藤子先生のミュージアムでしたっけ、にぜひ行ってみたいですね。はい。

We I We I Wuu： 今まで2度ほど岡本太郎美術館で演奏させていただきました。そして、プラネタリウムでも1回コンサートをさせていただきました。ほんとうに幻想的な場所で、そのときもアコースティックで演奏できました。すごく印象に残ってます。感謝してます。

小松亮太： 個人的な話なんですけど、焼き肉というイメージがやっぱり非常に強いんですね。僕、韓国料理が自分の人生の中で一番大きなウエイトを占めてるんですけども、特に意外と韓国に行くとなんか牛肉の焼き肉っていうのがそんなになくて、日本ならではの焼き肉の名所っていうと、例えば大阪だと鶴橋とか、色々あると思うんですけど、関東でいうとやっぱり川崎っていうイメージがありますね。実は1回川崎で食べたことはあるんですけども、確かにうまかったのもうちょっと極めたいというふうに思っています。

NAOTO： バイオリニストのNAOTOです。僕はサッカーが好きなので、フロンターレ川崎を見に行くというより、すいません、僕、大阪出身なんでガンバファンなんですけど、ガンバ対フロンターレをよく見に来ていました。

小松亮太： すいません、急に思い出しました。川崎で90年代ですかね、FMWっていうプロレス団体がありまして、川崎球場でよくやってたね。それはよくビデオでたくさん貸し出して、何か大事なことをやろうとすると、川崎で何かというところあの団体がやってたのは、もうよく覚えてますね。タイガー・ジェット・シンが暴れてたのが、ものすごく印象に残っております。個人的な話なんですけど。ちょっと要らなかったかもしれないですけど。

松谷卓： 松谷ですけども、もう随分前にはなってしまうんですが、知り合いを通じて、ドラマの「のだめカンタービレ」で撮影に使われていた洗足学園音楽大学、その大学に知り合いを通じて、大学には自分には行ってないんですけども、その学校にちょっとお邪魔させてもらって、いろんな楽器のことを教えてもらったり、そのの

生徒さんと交流を深めたりっていうことをしてた時期がありました。

朴葵姫： ギターの朴葵姫です。私は生まれて5歳まで日本に住んでたんですけども、そのときに住んでたのがこの近くの上大岡というところで、私はそこを名前を覚えられなくて、川崎って言ってしまったことが何回かあって、韓国に戻った後も、横浜の川崎に住んでたっていうのを言ってしまったことがあって、何回か最近まで取材でもそうやって言ってしまって、勝手に親近感を持っている、そういうところですね。そういう個人的な話ですが、そういう町です。

中孝介： すいません。僕だけ言ってないんで、そうですね、川崎、何度かイベントとかでもお世話になっていて、ラゾーナ川崎とかでは何度かフリーのライブをさせていただいたりとかしてましたけど、あと川崎、バレーボールも盛んで、僕、バレーボールずっとやってたんで、ぜひ選手たちに頑張ってもらいたいなと思いますね。ありがとうございます。

市長： ありがとうございます。

幹事社： ほかの社、どうぞ、あれば。

記者： 羽毛田さんにお伺いします。今回、音楽監督と同時にご自身でも演奏されるということなんですけれども、先ほどいろんな方とのコラボレーションをしていきたいなという話をされてたんですが、こういうイベントにおける音楽監督の役割というのはどういうものなのかということと、もうちょっと具体的にこんな感じのステージになるんじゃないのかというイメージが持てるような、今のところで結構ですので、構想がありましたら教えてください。

羽毛田文史： 音楽監督と言ってますけれども、皆さんが、出演するアーティストの方が最も個性を発揮しやすい状況をつくる、それは音楽的な面では当たり前ですし、それ以外にも過ごし方とか、リハーサルとか、そういうのがやっぱりアーティストの思い描いている音楽を実現できるように手助けする、用意する、状況をつくるということが一番の仕事だと思います。あと、今回自分も出演するというか、ずっとピアノを弾くので、自分も楽しめるようなコンサートに、うまくまとめて、自分も楽しめるような形にできるように、できればいいなと思ってます。

内容的には、少し小編成な形で、さっきも言いましたけれども、ミュージシャンの息づかいとかが生でお客さんに届くような編成にしようと思っているので、例えばバイオリン、チェロ、ヴィオラっていう弦カルテットにコントラバスを入れて、そこに少しギター、ギター1人とかっていうような、ほんとうにアコースティックな編成でやろうかなと。そうすると、多分なんですけど、PAシステムを使わないで、ほんとう

に生で、ここで鳴ってる音がそこに届くような形にできるように、そういう音響づくりを、やってみたいなって思ってます。そういうのはなかなかポップ的な音楽が入ると、そういうのって難しいんですよ。純クラシックだとそれはすごく簡単にできることなんですけれども、そうではないリズムが入ってくるような音楽をつくる時は、どうしてもPAを使わないと難しいんですけれども、そこは曲とか、編曲とか、ミュージシャンのバランスを取ることで解決できるんじゃないかなと、そんなコンサートのことをイメージしていただければ楽しめるんじゃないかなと思います。ありがとうございます。

記者： 羽毛田さんにお伺いしたいんですが、若干ちょっと重い質問で申しわけないんですが、今、日中韓なかなか大変な状況にあって、そういう意味でこのコンサート、どういう意味を持つのか、そしてどういったことを来ていただいた方に感じてもらいたいのか、その辺の思いを聞かせてください。

羽毛田文史： 意外にニュースとかで日中韓の問題が取り上げられてますけれども、特にミュージシャンは、ほとんど仲良しですね、みんな。音楽やる人は仲良しな人が多いですね。今回の意味というか、こうして日中韓そろってますけれども、意味としてはみんな仲良くやって、楽しい音楽をやってるんだということを、みんながそこで2時間なりの間に共有をしていただければ、楽しかったなという思いは一人一人の心に残りますから、そういうことが僕たち音楽家にできることなんじゃないかなと、その一瞬でもいいのでそういう楽しいひとときとか、癒やされるひとときをつくることができるという、音楽を通じてつくることができるというのは重要な役目かなと思ってます。

司会： では、質疑のほうはよろしいでしょうか。

それでは、続きまして、市長を囲んで記念撮影を行いたいと存じます。市長、関係者の皆様、演台の前へお進みください。

(写真撮影)

司会： ありがとうございます。本件につきましては、これで終了とさせていただきます。関係者の皆様方につきましては、次のご予定もございますので、ここで退席されます。本日はどうもありがとうございました。

市長： ありがとうございます。

《市政一般》

(待機児童対策について)

司会： それでは、引き続き、市政一般となります。幹事社さん、よろしくお願いいたします。

幹事社： それでは、よろしくお願いいたします。

市長： はい。よろしくお願いいたします。

幹事社： すいません、今、26年4月の保育園の入園に向けての手續が佳境だと思うんですが、26年4月というのは公約でも、もちろんちょっと現実的に難しいということなんですが、市長に就任されてから、より具体的な課題が見えてきて、今、手續も行われている中で、改めてどのような課題をクリアしていけば待機児童に近づけるですとか、そういった手応えのあたりを伺えればと思います。

市長： まず、基本方針みたいな形のはまた後ほど、後ほどというか、後日発表させていただきますけれども、何か1つやれば、全てが解決するというふうなことではありませんので、幾つかの合わせ技というか、そういったもので待機児童解消に向けて、今現場が一生懸命やってくれているところです。区役所の職員の方々、そろそろ不承諾通知、残念ながらというふうな通知も、今週末にも発送されるというふうなことになりますので、これ、これからいわゆる作業みたいなものが佳境に入っていますので、そういった意味でぜひ職員一丸となって取り組んでまいりたいというふうに思っております。今日も本部会議をやりましたので、そんなこともちょっと申し上げました。

幹事社： 今日の本部会議は、ほかにどんなことが話し合われたんですか。

市長： 今の状況というか、を確認して、方向性について議論したということです。今日も区長さんからこういうふうなやり方でやってますというふうな報告がありました。

幹事社： ありがとうございます。

(児童相談所元非常勤職員の逮捕について)

幹事社： じゃあ、まず、幹事社から1点。

先週、児童相談所で元職員が破廉恥事件というか、犯罪行為を起しましたが、その原因の1つとして、職員の不足というか、本来だったら2人で回るべきところを1人で回らざるを得ない状況だったとありますが、そこら辺の人不足についてはどういうふうに対応されていくのかなという、市長の考えをお願いします。

市長： まず、ほんとうにあってはならないことで、最後のとりでとなるところがまさかということで、ほんとうに怒りというか、悲しみというか、もうほんとうに何と

言葉で言いあらわしていいかわからない許しがたいことだというふうに思って、ほんとうに残念であります。今、再発防止についても、どういったことでやっていくのかということのを改めて確認をして、それにつなげていきたいというふうに思っておりますので、その人的なものだけでなく、運用面の部分も含めて対策をとっていきたくと、二度とこのようなことがないように行っていきたいというふうに思っております。

幹事社： じゃあ、各社、どうぞ。

(都知事選挙について)

記者： まず、都知事選なんですけれども、もうすぐ投票日が近づいてきて、各社の世論調査等々が出てますが、神奈川県知事のほうは、最初はどの候補も応援はしないというようなことは言っていたんですが、先日、舛添さんからの要請を受けて街頭にも立ったりしてるようですが、福田市長は今のところどなたかから要請があったりとか、いろんな論を聞いて、この方には共感できるとかっていうのは出てきたでしょうか。

市長： この前申し上げたとおり、仮に応援依頼があれば考えますと言いましたけれども、応援依頼ございません。

記者： そうですね。議論を見てて、直近で市長も選挙やられたんですけれども、都知事選の議論、脱原発がクローズアップはされてますが、防災面だとか、色々ありますけど、議論自体はどのように、大分深まってきてるかなという気はしますか。

市長： いや、というか選挙戦自体が、どうも外から見てるあれですけれども、何でこんなに盛り上がってないのかなという、何かそういう感覚はありますね。非常にこれ、私の選挙のときも超低投票率だったのが残念でならないという話をしましたけれども、とにかくやっぱり選挙に参加するということが、何と言っても民主主義の中で最も大切なことでもありますから、とにかく、都民についてああだこうだ僕言う立場にありませんが、やっぱり参加してもらいたいというのは隣の町としても思いますね。

記者： 今、世論調査等では舛添さんが優勢だというような形で、各紙、昨日とか一昨日とか新聞に出ていますけれども、誰がってということではないですけれども、福田市長が例えば選挙で戦って、市長はそう考えられてなかったかもしれないですが、選前、僕らとか、あるいは選挙の中の人たちは、ある候補のほうの方が優位ではないかというような見方をしたことは事実なんですけど、そういう中で、選前の予想を覆して勝つためには何が必要だったか、今を振り返ると、例えば今二番手、三番手にいる候補に送るメッセージとしたら、どうしたらいいかっていうの何かありますか。何が自分では

そういうのを覆す要因になったっていう、ひっくり返す手だては何かあります。

市長： いや、ほんとう、だから、皆さんの評価を覆してるっていう話だったんですけど、僕は覆したイメージがそもそもなかったです。

記者： じゃあ、やっぱり自分では先をいってると。

市長：僕はそう思ってたんで。

記者：なるほど。

市長：皆さんの予想に反して、自分でそう思っちゃってたんで、どうもすいません。

(大都市制度について)

記者： いや、そういう意味じゃない。同じ、もう一つ、大阪市長、橋下市長が昨日会見をやられて、出直し選挙をやるというようなことを言ってますが、ああいった1つの自分の公約が実現できないということに関して、出直し選挙をするという手法に対しては、福田市長は共感できるのか、理解できるとか、何かご所感ございますか。

市長：僕はああいう、まさに地方の形というか、自治の根幹にかかわるようなものっていうのは、選挙費用がかかるとかっていうふうなのは話はあるかと思いますが、一方でこれは1つの民主主義のコストだというふうな感覚はあります。しかし、私はこの全てが選挙でもって物事を解決すると、打開することっていうのが、一つの手法ではあるとは思いますが、私はそういう手法はとらないなというふうには思います。やはり二元代表として議会というものが選出されていると、そういうことを考えると、もう少しやり方はあるのではないかなというふうな気はしますけれども、ただ、何ていうか、よく6億も使ってやることはけしからんみたいな話っていうふうなのは、僕はそれはちょっと何か違うような気がいたしますね。

記者： お金の問題ではない。

市長： ではないと。

記者： では、今言ったように、市長としてはいわゆる、橋下さんはいわゆる反対を乗り越えるには選挙しかないというようなことを言って、いわゆる政治はある意味白紙委任だということも色々過去にも言ってますけれども、そういったことはちょっといき過ぎというようなことではない。

市長： いき過ぎって言った方がいいのかはあれなんですけれども、少なくとも選挙だけでしか突破できないような話っていうのは、ちょっと何か僕は乱暴なような気がしますけどね。

記者： 例えば、今首長としてそういう意識があると思うんですけども、市長自身

は県議もやられて、選挙前等とも私も議会人の1人だったということはよく言っていますけれども、議会の側から見て、自分が議員だとしたらどのように感じますか、首長がこういう形をとることに関してですね。

市長： ただ、僕、今回の一連の動きを見てると、何かどっちもどっちだみたいな部分もあって、ちょっと議会側もひとり相撲をさせてしまえみたいな、ちょっと悪意を感じる部分もあるので、何かそれってうまく絡まってないなっていう思いはしますね。ですから、市民の方たちはどう見てるんだろうなっていう思いますね。他の自治体のことをああだこうだ言うのも何ですけど。

記者： そもそも、その選挙っていう前に、いわゆる大阪都構想というのがありまして、ここも政令市ですけれども、その権限というか、集約して、もうちょっと二重行政をやめましょうというところから、その都構想がありますけれども、市長はこの大阪都構想についての考え方はどのように評価されてますか。

市長： 僕、1つの考え方として非常に評価してる部分あります。大卒の意味ではですね。ただ、今、政府のほうでも政令市のあり方の形で総合区みたいな話っていうのも出てきたり、いろんな考え方が出てきてるので、このあたりをどういうふうにやっていくのかっていうのは、これ、川崎もこれから課題になってくる話でありますので、こういうのをやっぱり実際の形だとか、仕組みだとかっていうのはなかなか住民の皆さんっていうふうなのに伝えるのって難しいんですが、こういうのをちゃんとやっぱり議論していきたいなというふうには僕は思っています。

記者： 川崎市は去年、いわゆる特別自治市の創設について考え方をまとめて、国にも要望ということされてますけれども、この特別自治市について市長は、市長になる前にまとめられてものなんですかけれども、この大都市制度についてはどのような考えを持ってらっしゃるんですか。今言ったところにもかぶると思うんですけれども。

市長： 基本的な今までの川崎市が考えてきた特別自治市制度というふうな考え方っていうのは、僕も尊重していきたいというふうに思いますが、一方でいろんな考え方っていうのも出てきていますので、今後の住民の皆さんとの議論を深めていかなくてはいけないなというふうに思っております。

記者： すいません、今、市長のほうからお話ししました総合区、いわゆる地方自治法の改正案がこの国会に提出される予定だと思うんですけれども、そこについて県と市が調整会議をつくるというようなところが盛り込まれてるんですけれども、それについてちょっといろんな首長さんの意見を聞いてみると、様々な反応があったりするやに聞いておりますけれども、福田市長はどういう、調整会議だけではないですけれ

ども、いわゆるその改正案についてどのようなお考えを持たれておりますでしょうか。

市長： 僕は総合区が最終的にどういう形だっというふうなのが、あらあらのしか出てきてないというふうに思いますので、僕はなるべく区役所、身近なところは身近なところでという区役所の権限強化というふうなことを申し上げてきておりますので、そういった意味では総合区というのは考え方としては非常に近いというふうに思っております。それから県との調整会議については、どんな、いろんな首長さんがいろんなコメントをされてるのって、ごめんなさい、私不勉強であれですけども、ぜひこういうのは広域自治体としっかりと議論をしていかなくちゃいけない課題だというふうに思います。

記者： 例えば、その調整会議のメンバーがどうだかっていうところがまだあまりぼや一としてるようなところがあって、どういう方がメンバーになるのかっていうのもわからない中で、調整会議っていうものだけが1つ形として出てきてるというところにやはり不安を覚える方っていうのもいらっしゃるんじゃないかと思うんですけども、何かそのあたりはご意見というのはございますでしょうか。

市長： 特に何というか、ぼやとした中でこういうのが不安だ、どうなんだって言ってもしょうがないので、少し形が見えてきてからというふうには思っておりますけれども。

(小杉駅地区周辺再開発について)

記者： じゃあ、いいですか。やわらかい話とかたい話、1つずつ。かたい話としては、今、ちょうど都市計画審議会が行われていて、市長から今日諮問があったことになっている武蔵小杉地区の再開発について話し合われてます。再開発については色々と賛否両論あると思うんですけども、今回市が深くかかわって、おそらく市は施行、事業主体である再開発組合にも入ることになるので、市が主体的に開発を行っていくという立場になると思います。つまり、民間を誘導するというのではなくて。で、この中でなかなか全体の地権者の人たちの合意形成が図れてない現状がある。まず、こういう状態を市長としてはどのようにお考えになれるかということが1つと、これは市長も市長選の中でおっしゃられていましたけれども、武蔵小杉は急速に発展した一方で、ビル風であるだとか、日照権、それから新旧自治住民のコミュニティーの問題などなど、色々あると思います。ですので、まだまだこの先にも開発が予定されていて、ちょっともう、このまんま突っ走っていいのかなという、再開発再開発で

いいのかなという意見もあります。合意形成がなかなか難しい個別の事案と、それからあと全体の武蔵小杉の開発について、今後どうしていくべきか、今のお考えをお聞かせください。

市長： まず、風害だとか、こういった環境評価みたいなものについてはしっかりやって、そのための対応というものもちゃんとやっていかなくちゃいけない、今後もやっていかなくちゃいけないというふうに思っています。一方で、個別な課題で再開発って、これ、多分つきものだと思いますが、全員の、最終的に全部が全員にぴったりと合意が図れるというのは、これ、極めて難しいことですから、そのために全てが進まないというふうなことになってはいけないというふうには思っています。そういった意味で説明を繰り返し行ってさせていただいたというふうには思いますが、一定期間のところまで時期が来たんだというふうに私は判断をいたしまして、スピード感を持ってやっていかなくちゃいけないというふうには思っています。今後の計画については、それぞれの個別な話になるとは思いますが、先ほど申し上げた環境評価みたいなものはしっかりやって、1人でも多くのというか、全員の合意を得られるような努力はしてまいりたいというふうには思っています。

記者： ちょっと言葉を変えると、開発ばかり優先で、地元の住民の人たちの、ちょっとウエットな言い方ですが、気持ちが置き去りにされているんじゃないのかということをおっしゃる方もいらっちゃって、一方で新住民の方はすごく快適なタワーマンション生活をして、都市部の生活を楽しんでいらっちゃって、市長がおっしゃるように全員が、今のは地権者の話でしょうけれども、地域の人たち全員がこれでいいんだって思うのは難しいと思うんですが、ただ、やっぱり調和を図っていかないとこの先難しいだろうと思います。ですので、開発と、それからそこに住んでる人たちの調和というか、どういう具合に折り合いを図っていくか、ぱっとは出てくる回答ではないと思うんですけれども、環境評価をしっかりやるとか、そういうことばかりではなくてですね。

市長： そうですね。

記者： うん。どういう具合にしていけばコミュニティーを維持していけるか、あるいは発展させていけるか、ありますか。

市長： そうですね。積極的に新住民の方もまちづくりに参加していただいているNPOだとか、団体の皆様もいらっしゃるので、そういう人たちが新住民、旧住民という変なくくりになっちゃうんですが、今までお住まいになってた皆さんと一緒にまちづくりをやっていこうというふうな動きが、さらに進展していくというか、

熟度を増していくということに、これからすごく期待したいというふうに思っています。そういう意味では、いわゆるソフト面というところがすごく重要なんじゃないかなと僕は思っています。

(音楽のまちについて)

記者： あともう1個だけ。1個戻りますけど、音楽のまちなんですけれども、市長はこれ、今回10回目なんですけれども、今までは1回聞きに行かれたことがあるかということ。あと、期待するところっていうのは、どういうところがありますか。

市長： 10回目になりますが、僕は残念ながら行ったことがなかったんです。今回初めてになりますけれども、非常に今日よくこれだけの著名な方たちが一堂に集まったなっていう、奇跡的な日程調整だったというふうに思うほど、やっぱりすばらしい方たちが集まって、この川崎で演奏していただけるというのはもうすごいことだというふうに思っていますので、私自身も楽しみたいと思いますし、みんなに呼びかけたいと思っています。

記者： 市民の人たちに呼びかけるとするならば、どういうふうに呼びかけますか。

市長： 音楽だけじゃなく、今回いわゆる食の部分というのもあるので、食も集客の1つというか、音楽と食を一体的に楽しめる今回のフェスタだというふうに思っていますんで、そういう意味で誘いやすいという言い方はあれですけどね。音楽だけでも魅力的なのに、それ以外の魅力というのもふんだんにあるぞというふうに思います。

記者： ありがとうございます。

司会： それでは、以上をもちまして、市長記者会見を終了いたします。どうもありがとうございました。

市長： ありがとうございます。

(以上)

この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理したうえで掲載しています。

(お問い合わせ) 川崎市役所総務局市民情報室報道担当

電話番号：044(200)2355